

WORK BOLD

小柳建設と人、社会、自然をつなぐ
CSRレポート 2016

想 私
い た
ち の

会社概要

社名	小柳建設株式会社
本社	〒955-0047 新潟県三条市東三条1丁目21番5号 TEL. 0256-32-0006
創業	1945年(昭和20年)11月
資本金	3億5千万円
代表者	代表取締役会長 小柳 直太郎 代表取締役社長 小柳 卓蔵
URL	http://n-oyanagi.com/

事業内容

1. 建設工事の請負、企画、設計、監理およびコンサルティング業務
2. 不動産の販売、交換、賃貸、仲介およびその管理ならびにコンサルティング業務
3. 住宅の建設および販売ならびに土地の造成および販売
4. 地域開発、都市開発、環境整備等の事業ならびにこれらに関する請負、企画、設計、監理およびコンサルティング業務
5. スポーツ施設、レクリエーション施設、福祉・健康・医療施設の保有、賃貸および経営
6. 労働者派遣事業法に基づく労働者派遣業務
7. 公共施設の管理、運営業務
8. 遺跡・文化財の調査、測量、整理作業、報告書作成、保存活用、支援業務並びにコンサルティング業務
9. 自然エネルギー等による発電事業およびその運営・管理ならびに電気の供給、販売等に関する業務
10. 介護保険法に基づく地域密着型サービス、地域密着型介護予防サービス事業
11. 前各号に付帯する一切の業務

許可関係

国土交通大臣許可 (特・般-24) 第13415号
一級建築士事務所 新潟県知事登録(口)第4396号
宅地建物取引業 新潟県知事(2)第4894号
測量業許可 登録第(2)-33094号
特定派遣業許可 特15-300168
ISO9001:2008(品質マネジメントシステム)ISOQAR7276
ISO14001:2004(環境マネジメントシステム)ISOQAR7276
ISO/IEC27001:2013(情報セキュリティマネジメントシステム)SGS JP12/080230

関連会社

健康増進・教育複合施設 ホワイトスィム秋葉スクール
介護施設 茶話本舗デイサービス天佑戸頭

事業所

本社	〒955-0047 新潟県三条市東三条1丁目21番5号 TEL. 0256-32-0006(代)
加茂本店	〒959-1326 新潟県加茂市青海町1丁目5番7号 TEL. 0256-52-0008(代)
東京支店	〒102-0072 東京都千代田区飯田橋2丁目9番3号 TEL. 03-3230-8578
新潟支店	〒950-1344 新潟県新潟市西蒲区福島下新田1261番地1 TEL. 025-375-1238
長岡支店	〒954-0124 新潟県長岡市中之島4156番地8 TEL. 0258-66-0007

村上営業所/新発田営業所/東蒲原営業所/田上営業所/燕営業所/柏崎営業所/魚沼営業所/上越営業所/
岩手営業所/宮城営業所/山形営業所/福島営業所/茨城営業所/千葉営業所/横浜営業所/滋賀営業所/岡山営業所/
新潟事務所/千川事務所/東京工事事務所/新潟機材センター



WORK BOLD

発行・編集 (2016年4月1日) 小柳建設株式会社
〒955-0047 新潟県三条市東三条1-21-5 TEL. 0256-32-0006

愚直なまでに、
敢然と、
一丸となって、
地域のために。
小柳建設の**想い**です。

近道をせず、
易きに流れず、
浮利を追わず、
決して怠らず、
決して目立たず。
正しき道をただ真っ直ぐに、
人びとの暮らしのために、
世の平穏のために。
地域社会の一員として、
心を一つにして。
私たち小柳建設は歩み続けます。

「WORK BOLD」 小柳建設と人、社会、自然をつなぐ CSRレポート2016

WORK BOLD：直訳すると、大胆な仕事、果敢な仕事。あるいは、力強く、際立った働き。困難な仕事にも果敢に挑む強い意志を持って、しっかりと社会に貢献していきたいという小柳建設の想いを込めました。

All photographs by: 嶋本文士 <http://jojishimamoto.com>

私たちの想い

目次

WORK BOLD
小柳建設と人、社会、自然をつなぐ
CSRレポート2016

04 特集 新潟県加茂市金剛谷法面工事
人を、自然を、守る。

09 燕市中央公民館耐震改修等工事
“取り合い”に見せる、熟練の腕。

12 田上地区交差点改良第2次工事
新潟初、事故をなくす交差点に挑む。

14 見附市コミュニティ銭湯建設工事
“健幸”な街、その象徴をつくる。

16 新潟県県央地区除雪事業
雪をも溶かすプロフェッショナルリズム。

18 日本橋川しゅんせつ工事
水の都復活へ、夢を担う。

20 五十嵐川災害復旧助成事業 永田新橋床板・取付道路工事
川とともにある、穏やかな暮らしを再び。

22 国道289号2号橋梁下部その3他工事
歴史に埋もれた道を、表舞台に。

24 環2仮設道路整備工事その4-2
息を凝らして刻む、最後の一步。

26 社内での取組み



人を、自然を、守る。

強い意志で続けた10年を超える難工事

新潟県のほぼ中央に位置する加茂市は、古くから「北越の小京都」と呼ばれてきた。平安時代には京都の上賀茂神社・下鴨神社の社領であったことが地名の由来であり、鎮守社である青海神社の祭神も京都から分祀されたものである。

東西に細長く広がる市街地の真ん中を流れる加茂川にはいくつもの橋が架かり、古い街並みと相まって小京都と形容されるにふさわしい景観に彩られている。

青海神社が鎮座する加茂山の懷に抱かれるように家々が立ち並ぶ金剛谷地区は、道路脇の水路を加茂山からの湧き水が流れ、春には雪椿、秋には紅葉を間近に眺めることができる、加茂の奥座敷といった風情の町である。

ただ、急峻な谷間に広がった町だけに住民は災害と隣り合わせて暮らしてきた。このため新潟県は急傾斜地崩壊危険区域に指定、対策工事を小柳建設が請け負った。

加茂はかつて小柳建設が本社を置いていたゆかりの地であり、今も本店を置く。「災害出勤の要請があれば真っ先に駆けつけてきたし、金剛谷は小柳が絶対を守るという強い気持ちだった」と常務執行役員の片野正之は語る。急傾斜地対策とその後の災害復旧を合わせると、金剛谷での難工事は足掛け10年を上回るものとなった。

環境保全事業部
事業部長
井出 光



6人で紡いだ 地域とのつながり。

金剛谷地区の法面補強工事は6人の現場責任者が交代で担当した。住民の方々へのきめ細かな対応や施工ノウハウなど、うまくバトンをつなげたことが成功のカギとなった。

常務執行役員
営業本部副本部長
片野 正之



社員の強い連携が 大きな成果を生んだ。

小柳建設の発祥の地である加茂を守る。その思いが組織内の壁を超え、社員が一丸となった原動力だった。みんなが十二分に力を発揮した記念すべきプロジェクトとなった。



急斜面に施工された緑化。自然な植生と景観を保つため、古木を守りながら施工している。



急峻な斜面においても、緑化工法の効果は着実に現れている。



美しい紅葉を見せる加茂市内。この景観の保全に自治体や市民が積極的に取り組んでいる。

小京都の景観を守るため 独自の緑化工法に挑む

崩落の危険性が高い場所は斜面に鉄のアンカーを深く打ち込んで強度を高め、表面はコンクリートを格子状に造成した法枠で覆う本格的な法面補強工事が金剛谷地区で行われることとなった。

だが、道路は狭く大型のトラックや重機は入れない。しかも急斜面の下には墓地が広がっている。墓の間を縫うように工事用モノレールを這わせて、小型の機械を搬入した。機械を一旦解体して運び入れ、現場で組み立て直すこともあった。崖の高さは一番高いところで高低差50メートルにもなる。現場スタッフたちは命綱を頼りに斜面に張り付いて作業を行った。

もう一つ大きな問題があった。それは景観との調和だ。美しい景観が貴重な観光資源となっている地域だけに、コンクリートむき出しの法枠はそぐわない。そこで小柳建設では、法枠上を緑化する工法に初めて挑んだ。特殊な袋状マットで法枠を覆い、そこに用土や水を注入して成育基盤を整え、植物を育てるのだ。この工法で岩盤上に植生した実績はあった。その経験を生かしつつ、現場で試行錯誤しながらコンクリートの法枠上に緑を復元していった。手作業で仕上げる部分も多く苦勞の連続だったが、今では周囲の植物が遷移し、見事に景観と調和している。

困難な条件の中で学び、高めた技術。それが美しい自然の中での穏やかな暮らしを影で支えている。



統括積算部 所長
渡邊 貞介



環境保全事業部 法面工事課 課長
樋口 竜也



環境保全事業部 法面工事課 主任
石塚 俊也

金剛谷地区は住宅や寺、学校などが肩を寄せ合うように立ち並ぶ地域での工事だけに、住民の暮らしや安全を妨げないよう、歴代の現場責任者たちは細心の注意を払った。「会社名と名前を覚えてもらい、よい関係を保つために、責任者が代わる度に必ず地域の

方に挨拶回りをした」(渡邊)。「お墓参りの邪魔にならないよう工事を止めたこともある」(樋口)。「現場管理の基礎やコミュニケーションの大切さを金剛谷であらためて学んだ」(石塚)。

“取り合い”に見せる、熟練の腕。



地元への細かい気配りに感謝したい。

加茂市五番町区長・船久保 幹夫さん

金剛谷地区は行政区分上、五番町と上町とにまたがる。この地で生まれ育った船久保幹夫さんは五番町の区長を務めて7年目。「加茂川は改修工事で水害の危険がなくなりましたが、大雨が降ると崖崩れがずっと心配でした」。

その崖崩れを防ぐ工事を担った小柳建設については、「住宅街での工事だったので神経を使ったと思います。ひと月に一度は報告に来てくれ

たし、住民の安全対策や騒音防止にも十分配慮してくれました。ゴールデンウィークで加茂山公園の人出が多くなる時期には、現場スタッフの人たちが総出で遊歩道のゴミ拾いをしてくれたこともありました」と振り返る。

その気持ちを船久保さんは感謝状という形にして小柳建設に渡してくれた。工事に関わったすべての者たちにとって、何よりの宝となっている。

若い人たちの懸命さに打たれた。

耕泰寺住職・知野 東悟さん

金剛谷の一番奥まった場所にある耕泰寺は、1600年開山の由緒あるお寺。現在の住職、知野東悟さんで25代目という由緒ある禅寺である。耕泰寺には鐘撞き堂がない。鐘の響きで山が崩れるからだ、と言い伝えられるほど崩れやすい急斜面に接している。2011年の新潟・福島豪雨ではすぐ脇の斜面が崩れ、道路をふさいだ。その復旧工事小柳建設が

担当した。「墓があるので工事は大変だったと思います。工事の最中に土の中から古い骨が出てくることもありましたが、小柳建設の人が私を呼びに来てくれて、心を込めて弔うことができました。とにかく若い人たちが一生懸命やってくれたことが印象に残っています」と知野住職。先人たちの魂が落ち着いて休める環境が整ったことに安堵している様子だ。



子供たちを安心して遊ばせられる。

本量寺保育園園長・大森 蓉子さん

開園から60年を迎えた本量寺保育園には、加茂市内全域から約150人の園児たちが元気に通ってくる。その園庭のすぐ近くまで急斜面が迫っており、雪と一緒に表層が崩れることもあった。

「何より子供の安全が第一。土砂崩れ防止工事をきちんとやっていたので、子供たちを安心して遊ばせられます」と園長の大森蓉子さん。工事中、働く人や動く機械に子

供たちは興味津々。そこで、現場責任者だった環境保全事業部法面工事課の石塚俊也は、子供たちを招いて見学会を開いた。

「作業を順に説明しながら、近づくといけないということを理解してもらうにしました」。安全教育を兼ねたこの見学会でも子供たちは大はしゃぎ。

「その後も工事を見るのを本当に楽しみにしていましたね」と大森園長は懐かしそうにほほえんだ。



園児を招いた現場見学会。



予期せぬ課題を解く臨機応変の柔軟性

信濃川の分流、中ノ口川の左岸にそびえ立つ、水道の塔（旧浄水場配水塔）。国の登録有形文化財でもあるこの塔の足元に中央公民館や文化会館などが一体となった燕市の中核文化施設、総合文化センターがある。各種の教養講座や展示会、コンサートなどが開かれ、この場所ですらサークル活動を楽しむ市民も多い。学生からシニアまで、さまざまな人たちが集い、語らい、交流を深める、コミュニティの文化拠点である。

中央公民館は完成から40年以上が経ち、大規模な改修が必要な時期を迎えた。併せて、市民の安全を守るための耐震補強工事を実施されることになった。

改修工事の場合、建物として残す部分と取り壊す部分がある。図面や外観からはわからなくても、仕上げをはがしてみると問題が現れることも少なくない。例えば、古い部分の水平・垂直が経年変化で微妙にずれていたりと、改築する部分との「取り合い」（部材の組み合わせや接続）がおかしくなる。「取り合いをいかにうまく合わせるか。それが改修工事での腕の見せ所です」。大規模施設の改修経験が豊富な現場責任者、笹川雅史はそう話す。

現場入りしてはじめて分かる課題をどう解決するか。

笹川は、「一人で悩んでいても仕方がない」と割り切つて、いろいろな人に相談し、話を聞くことにしている。「二人ひとりが勝手に動いていたら仕事になりません。人と人が一緒になって何かをやるうと思つたら、コミュニケーションがいちばん大事です」。笹川は人懐こい笑顔を浮かべながらそう断言する。笹川自身がコミュニケーションの接続拠点となつて、会社の先輩たちや現場にいるスタッフ、外部の協力会社などさまざまな人たちが持つノウハウや技術の「取り合い」をうまく合わせること、予期せぬ課題に対応できる柔軟性が身に付いた。

本工事は大規模改修に加えて、耐震補強も同時進行しなければならず、工程管理はさらに複雑だ。しかも、総合文化センター内の文化会館などの施設は平常通り使用されており、人の出入りもある。笹川が心がけているのは、「工事ではなく、施設を使う人を最優先する」とこと。そのために、施設側とも緊密なコミュニケーションを欠かさない。

すべてはここに集う人たちのためにある――。

笹川はいつもの気持ちを忘れずに、大規模施設工事の現場に立ち続けている。



写真の右側（文化会館）は工事中も平常どおり使用されている。訪れる人の安全確保も重要になる。



改修工事と耐震補強工事が同時進行する現場の工程管理は複雑だ。



株式会社コンステック 新潟営業所
池田 拓人

耐震補強用プレス(左写真)の重さは1本360キロ。コンステックの池田さんは、「重量物を現場で組み立てるので安全確保のため笹川さんと何度も話し合いました」と振り返る。



建築事業部 所長
笹川 雅史

「どの現場でも、トラブルなく工事を終えた時は気持ちが晴れ晴れします」。人が集まる公共施設の現場経験が豊富な笹川は、いつも使う人の目線で改修工事を進める。

新潟初、事故をなくす 交差点に挑む。



低温のなか、人員と機材、舗道事業部の総力を挙げた作業が続く。

時間勝負を制した緊密な連携

信濃川下流域に広がる田園地帯。その真ん中に、直径30メートルほどの大きな円が突然姿を現した。円を中心に道路がまっすぐ四方に伸びているその様は、どこか南米ペルーの世界遺産、ナスカの地上絵を思わせる。

これが新潟県で初めてとなるラウンドアバウト（環状交差点）だ。クルマは減速してこの交差点に流入、時計回りにゆっくりと移動しながら、目的方向の道路へと出て行く。交通事故防止に効果があるだけでなく、信号いらずで環境にもやさしい交差点として欧米では普及が進んでいるが、日本にはまだ50カ所ほどしかない。

県内で前例のないこの交差点の舗装工事を小柳建設舗道事業部は、わずか20日足らずで完了させた。「アスファルトできれいに円を描く舗装は初めてで、曲線の施工が難しかった。供用開始まで時間もなく、事業部全員で取り組む総力戦でした」。舗道事業部長の吉田浩司はそう振り返る。

しかも、施工時期は通常なら舗装を行わない厳冬期。アスファルトは温度が下がると平坦に敷きならすことができず、品質が悪くなるからだ。

入社7年目の清水彪目（ひょうめ）はアスファルト混合プラント工場と緊密に連絡を取りながら出荷のタイミングや温度を指示、搬送中はトラックの荷台にシートをかぶせるなど適温に保つため知恵を絞った。アスファルト混合材が現場に到着したら、適温のうちに敷きならし、締め固めまで一気に作業を進めなければならない。「ラウンドアバウトは初めてだったので不安な部分もありましたが、チームで挑み、やり遂げることができました」。スタッフたちのスムーズな連携が、時間勝負の工事を制した。

紫陽花の名所として知られる地元・田上町は、町の新たなランドマークとしての期待を込め、このラウンドアバウトを「田上あじさい交差点」と名付けた。



舗道事業部 主任
清水 彪目

「道路舗装はいつも時間勝負。時間がない中で、先を読んで次に何をするか。周りに気を配りながら、チームプレーに徹しています」。



通常なら道路舗装を行わない真冬の作業だけに、いっそうの迅速性と緊密な作業連携が求められた。



ラウンドアバウト「田上あじさい交差点」は、安全性向上だけでなく観光の起爆剤としての期待も高い。



曲線の仕上がりには、細心の注意を払う。スタッフの技術が問われる仕事だ。

“健幸”な街、 その象徴をつくる。



工事の足場が外されたとき、年間20万人以上の利用が見込まれる新たな集客・交流施設が市街地の真ん中に姿を現すことになる。

複雑な多機能施設の施工を支える緻密さ

「建物ができる前は地図上には何も無い。建物をつくることによつて地図が変わる。おれたちはそういう仕事をしているんだと若い頃、先輩に教わりました。そうしたタイナミックな仕事の醍醐味を後輩にも伝えていきたいと思っています」。見附市コミュニティ銭湯の建設現場で、現場責任者を務める笠原豊はそう語った。

ここはまさに街中の地図を、あるいは中心市街地のあり方そのものを大きく塗り替えようとする現場だ。

新潟県の「へそ」に位置するといわれる見附市の人口は4万人強。「見附結城」など繊維産業で知られたこの街も、産業構造転換の荒波とは当然無縁ではいられず、にぎわい創出が大きな課題となっている。そこで、街中への集客と市民交流の起爆剤として市が建設を決めたのが、この「コミュニティ銭湯」だ。

市は住民が健康でいきいきと暮らせる“健幸”な街づくりを目指して、「スマートウェルネスみつけ」のスローガンを掲げているが、人びとが集い、語り、くつろぐこの銭湯は、それを具現化する中核施設となる。

市は民間の活力とノウハウを生かしながらこの街づくりを進めようとしている。コミュニティ銭湯は市が発注し、小柳建設と地元・荒井建設の特定共同企業体が建て、指定管理者制度に基づき、運営は民間業者が担う予定だ。

地上3階建ての施設は、1階にレストラン、カラオケ室、イベントにも使える多目的室などが入り、2階は9種類の露天風呂と内風呂、サウナ、3階は岩盤浴と休憩スペースなどを備え、1階と3階は災害時の避難所としても使われる。

多くの機能を持つだけに一般の公共施設に比べて全体のつくりが複雑で、内装は部屋ごとに異なる。ろ過装置やボイラー、厨房機器など機械設備も多く、天井内には多くの配水管などが張り巡らされる。そのため、ピーク時には約150人もの関係者が館内至る所で施工に当たる。それを笠原らが中心となり細心の注意を払って管理する。「仕上げの細かい部分まですべての関係者が把握している必要があるので、常に現場に出て確認、指示するようにしています」（笠原）。緻密な施工管理があつてこそ、この多機能施設は本来の目的を果たすことができる。完成後には地元の人たちと一緒に、ゆつくりと風呂に浸かってみたい。笠原はその日を心待ちにしている。



建築事業部 所長
笠原 豊

工事現場を通りすぎた住民から「いつできるの?」と声を掛けられることも多く、「完成を待ち望んでいる気持ちをひしひしと感じます」。



銭湯をはじめとする多機能施設だけに、給湯管などのさまざまな配管が張り巡らされる。



分厚い設計図の束を持ちながら現場を歩きまわって仕上げを確認する。



3ヵ所にウェブカメラを設置し、事務所など離れた場所からも現場の状況を常に確認できるようにした。

雪をも溶かすプロフェッショナルリズム。



家々が寝静まった頃、除雪車両が並ぶ出動拠点にスタッフたちが集まってくる。



雪を巻き込んで進む除雪ロータリー。雪の下に構造物にも細心の注意を払う。

「この路線はおれが守る」という使命感

深夜、人知れず雪と格闘する者たちがいる。

雪の降り具合から積雪量を読み、仲間に素早く召集をかけ、持ち場に散っていく。機械を手足のように操って雪を取り除いた後は、人びとが目覚める前にそっと姿を消す。

大規模工事でインフラを整備したところで、人手をかけてメンテナンスしないことには、その機能を果たすことはない。インフラが機能しなければ、日常生活の安全は脅かされ、経済は麻痺する。その典型が道路である。

小柳建設舗道事業部では、地元の加茂市、三条市を中心に新潟市、燕市、田上町で延べ210キロメートルの道路の除雪を行政から委託されている。

「委託事業なので自主判断で出動します。積雪量9センチメートル以上が出動基準と決まっていますが、道路条件などによってそれ未満でも危険だと判断すれば出動します」と舗道事業部副部長の伊藤智克は語る。

指示を待つのではなく、自分の意志で機敏に動く。その原動力は「担当する路線はおれが守る」という強い使命感だ。

除雪にはさまざまな機械を使う。小回りが効く除雪

ドーザー、庄雪に強い除雪グレーダー、雪を巻き込んで飛ばす除雪ロータリーなど。これらの特殊車両を使いこなすには熟練の技を要するが、「もともと大切なことは細かいところまで気を配っているかどうかです」と伊藤は言う。雪の下に埋もれている構造物はないか、除雪によって脇道や民家の入口がふさがれたりしないか、配慮すべき点はいくつもある。

「自分が担当する道路の状態や使用状況などは日頃から注意しています。雪が積もる前に担当の路線を走って、どこになにかあるかを頭にたたき込んでいます」（舗道事業部主任・横田孝明）。

冬の新潟のライフラインは、男たちの技と揺るぎないプロフェッショナリズムに支えられている。



舗道事業部 副部長
伊藤 智克

舗道事業部 主任
横田 孝明

「いい除雪は機械を動かす腕より気配りです」（伊藤）。「道路を使う人の立場になって丁寧に除雪しています」（横田）。

水の都復活へ、夢を担う。



都民が求めた唯一無二の技

五街道の起点である日本橋の下を流れ、隅田川へと注ぐ、日本橋川。水面からわずか5〜6メートルの高さは、川の上空をふさぐように首都高速道路（首都高）が走っており、車がせわしく行き交う。

その首都高の高架下と川面に挟まれた狭い空間で、見慣れない船が作業している様子を道行く人が時折、珍しそうに眺めている。

何気ないようにも見える大都会・東京の一風景だが、実は小柳建設において、この現場で浚渫（しゅんせつ）作業ができる建設会社はほかにない。

川底の土砂をさらう浚渫船にもさまざまなタイプがあるが、ほとんどは大型で小さな川には入れない。一方、小柳建設の船は小型で、分解すればどこへでも持って行ける高い機動性を持つ。日本橋川で作業する船は新潟県から陸送した。「いくつもの橋をくぐらせ、現場に搬入し、組み立てました」と現場責任者の玉木陽祐は語る。

この現場で小柳建設が選ばれた訳は、ほかにもある。川底の土砂を機械ですくい取る一般的な浚渫工法は、土砂を水中で巻き上げ、水を濁らせてしまふ。周囲をオフィスビルやマンションなどに囲まれ、人通りも多い日本橋川の現場ではそうした工法は適さない。小柳建設独自の工法は、コンプレッサーで真空状態を作って土砂を吸い取り、圧縮空気力でパイプを通して、離れた場所にある土運船に送る。これなら悪臭は出ないし、水を汚さない。小柳建設はこの工法を用いて、皇居・千鳥ヶ淵や神田



川面と高架に挟まれた狭い空間でも小柳建設の浚渫船なら大丈夫である。

川など東京のいくつもの川や濠（かど）で、水質環境改善に貢献してきた。

狭い川での作業だけに難しさもある。現代の浚渫船はGPSで船体の位置や浚渫する深さを確認しているが、首都高に頭上をふさがれたこの現場では衛星電波の受信状態が不安定なため、GPSを使えない。「オペレーターが水位と仕上げの高さを慎重に確認しながら作業を進めています」（玉木）。小柳建設の社員たちはここでも熟練の技を見せている。

かつてはイタリア・ベニスに例えられるほどの親水都市であった東京。日本橋を中心にそうした都市環境を蘇らせようという気運が高まっている。その大きな夢の一翼を小柳建設は担っている。



有限会社新海 社長
横田 清

「現場が好きで時間があれば浚渫船に乗っていますが、小柳建設の若い人たちが河川の仕事に興味を持って、熱心に質問してくれるのがうれしいですね」。



土木事業部 主任
玉木 陽祐

「浚渫工事での現場責任者は今回が初めてですが、頼りになる現場スタッフたちと一緒に東京のと真ん中で成果を上げたいと思っています」。



吸い取った土砂はパイプを通して離れた場所にある土運船に送る。

川とともにある、 穏やかな暮らしを再び。

足かけ5年に及ぶ災害復旧の総仕上げ

「有事にこそ真価を発揮するのが建設業。会長からいつもそう言われてきました。だからこそ、この災害復旧工事をやり遂げて地域の役に立ちたいと願いながら、日々取り組んでいます」。常務執行役員の高橋勝行は、おだやかな語り口の中に時折強い決意をのぞかせる。

2004年夏の集中豪雨による水害の復旧工事がようやく終わった2011年7月、中・下越地方は再び猛烈な豪雨に襲われた。総雨量は7年前の集中豪雨の2倍以上。6河川で9カ所の堤防が破れ、住宅被害は全半壊約850棟、床上・床下浸水約8670棟と広範囲に甚大な被害をもたらした。

災害発生直後から小柳建設の社員たちは三条市や加茂市など地元各地の災害現場に急行、音を立てる濁流のすぐそばで応急復旧の作業に当たった。高橋自身も2日間家に帰らず、交代で大型土嚢を積み上げた。

三条市を東西に横断し、信濃川に合流する五十嵐川でも、堤防決壊、越水が各所で発生した。本格的な復旧工

事が始まったのは2012年。河川の改修にとどまらず、上流のダムをかさ上げし、下流部に洪水調整の遊水地を新設するなど、川をつくり変えるほどの大規模な計画となった。二度と水害は起こさないという関係各者の強い意志の表れでもある。

足かけ5年、小柳建設は五十嵐川復旧事業の現場で、護岸、河床掘削などの工事に一貫して携わってきた。その総仕上げともいえるのが、上流部の棚鱗^{たなひれ}と田屋の両地区を結ぶ永田新橋の架け替え工事だ。川の湾曲部に当たる橋のたもとから下流部にかけては、約300メートルに渡って道路が削り取られた。このため、川を拡張して新たに110メートルの橋を架け、道路を付け替える。稲刈りを迎える時期には新たな橋が開通する予定だ。「完成すれば、雨が降る度に感じていた住民の方々の不安もやっと解消されるはずです」。橋げたの上で続けられる作業を見つめながら、高橋は静かにそう語った。



右手の橋が完成すると左手の現橋は取り壊され、復旧工事が終わる。



増水を防ぐために川幅を広げ、堤防を新設。写真奥の棚鱗地区と手前の田屋地区を新橋が結ぶ。



土木事業部 所長
小野 幸雄

危険な現場をいくつも経験してきた小野だが、「現場のすぐ下を川が流れている。転落防止の安全対策に細心の注意を払っている」。



常務執行役員 土木本部 副本部長
高橋 勝行

永田新橋の架け替えは五十嵐川本流部では最後の災害復旧事業だけに「早く完成させて地域の人たちの不安解消につなげたい」。



急峻な斜面上にある作業現場までトロッキを設置、作業効率が格段に向上した。



小柳建設の施工担当の橋台より、現場全体を臨む。最終的には谷の反対側のトンネルまで橋で結ばれる。

悲願の八十里越全通へ 受け継がれる想いと技術

「八十里 腰抜け武士の 越す峠」

幕末、越後長岡藩家老の河井継之助が官軍との戦いで深手を負い、敗走の途上で詠んだ句とされる。河井は生きて再び越後の地を踏むことはなく、この悲劇の英雄にとって辞世の句となった。

急峻な山々と深い渓谷を縫うように続く峠道は、実際には八里（約32キロメートル）の距離しかないのだが、それが10倍の長さにも思えることから古来、八十里越と呼ばれてきた。その険しさにも関わらず、新潟県中越地方と福島県南会津地方を結ぶ最短ルートであったことから、古くは戦国時代から食料や生活物資を運ぶ重要な街道であったと伝えられる。だが、鉄道網が整備されるにしたがってその役割を取って代われ、物資と人が行き交ったこの峠道は歴史の中に埋もれていった。

一度は忘れ去られたこの街道を現代の土木技術で表舞台に蘇らせようとする試みが続いている。それが小柳建設も長く関わっている「国道289号 八十里越」事業だ。

一筋縄の工事ではない。1000メートル級の山々を約20キロに渡って貫く工事区間のほぼ8割はトンネルと橋が占めている。硬い岩をうがち、深い谷に橋を架ける難工事が延々と続く。しかも、国内有数の豪雪地帯であるため、1年のうち半年は雪に閉ざされ工事ができない。

い。着工から30余年、それこそ一歩一歩足場を踏み固めるようにして、男たちは道路を前へ前へと延ばしてきた。開通すれば、福島・只見町から県境を越え三条市まで車で約1時間。救急車が最寄りの総合病院に到着する時間が半減する。まさに命の道なのだ。「私の20年の現場経験の中でも指折りの難工事ですが、小柳建設が長く八十里越事業に携わる中で培った技術とノウハウがあります。それを生かして1日も早く完成させたい」（土木事業部所長・村山宏樹）。

男たちは今日も難しい山岳工事に黙々と挑む。受け継いできた技術と新たな道の完成を待ち望む人びとの思いを胸に。



土木事業部 所長
村山 宏樹

「さまざまな制約の中で、どの技術をどう組み合わせれば、安全かつ工期通りに仕上げられるか。毎日、頭をフル回転させました」。最大斜度45度、スキージャンプ台より勾配のきつい山腹に橋を支える橋台を築く山岳現場で、現場責任者の村山宏樹は、幾度も計画変更をしながら難度の高い工事をやり遂げた。



小柳建設は築地大橋へのアプローチ道路を担当。市場移転の物資運搬にはこの道路が使われる。

東京の2大プロジェクトを担う重責

2016年11月、東京の台所がほぼ70年ぶりに大移動する。その一大事業の移動ルート整備を小柳建設は担っている。

築地市場——11カ所ある東京都中央卸売市場で最も古い歴史を持ち、水産物の取扱規模では世界最大級。東京の胃袋を支えるため、昼夜、人や車の出入りが絶えず、近年は観光スポットとして大勢の訪日観光客でも賑わう。

その築地市場が築地大橋、黎明大橋、豊洲大橋と3つの橋を経て直線距離で約2キロメートル離れた豊洲へと移転するのである。このルートは2020年開催の東京オリンピックにおいて、選手村などがある臨海部と競

息を凝らして刻む、
最後の一步。

技場がある都心部とを結ぶ環状2号線の一部でもある。

総延長約14キロメートルの環状2号線のほとんどは完成しているが、最後に残った未開通部分が築地市場敷地内のトンネル区間。築地市場が移転しなければ着工できず、市場移転の遅れは、東京五輪メインストリートの完成の遅れに直結する。それだけに、移転ルート整備を担う小柳建設には重い責任がのしかかる。

小柳建設はこれまで、東京都の事業を数々請け負い、その期待に応えてきた。それだけに、現場には失敗が許されない緊張感が漂う。

工事期間中も築地市場は24時間稼働しており、現場のすぐ脇を行き交う人や車の動きを妨げることはできな



現場から一望できる東京湾ウォーターフロントの伸びやかな景観は、緊張感漂う現場と好対照をなす。



東京の台所・築地市場は間もなく豊洲に移るが、その移転ルート整備を小柳建設が担う。



軟弱な地盤と老朽化した地中の水道管など難題の多い現場だけに、慎重な協議を重ねながら工事を進める。



東京工事事務所 土木部 所長
安藤 彰

鉄道工事の経験も豊富な安藤だが、「道路工事は技術の選択枝の幅が広く、苦勞も多いがやりがいもあります」と語る。

い。そのうえ、埋め立て地のため地盤が軟弱で、地中には古くなった水道管やガス管が埋もれている。「ボーリング調査で地盤を確認し、補強しながら工事を進めていきます」と東京工事事務所土木部所長の安藤彰は安全第一を強調する。

老朽化した地中の水道管やガス管にダメージを与えないよう発泡スチロールを使って軽量化を図るなど細心の注意を払う。

豊洲新市場開場と東京五輪開催という2つのビッグプロジェクトにつながる最後のワンピースを、安藤らは息を凝らすほどの慎重さで仕上げようとしている。

新潟県中央工業高校職場見学会

次世代に引き継ぐ、
地域と建設への思い。

国土交通省北陸地方整備局信濃川下流河川事務所と小柳建設は2016年2月、県立新潟県中央工業高校の生徒を招いた職場見学会を開催した。産学官が連携して建設業の仕事について理解を深めてもらおうという試みには、建設工学科2年生の38人が参加。河川管理施設や建設現場などを見学した後、同省若手職員と同校OBの小柳建設若手社員の体験談を聞き、仕事のやりがいなどについて熱心に質問した。

38人の高校生たちが建設現場などを訪れた。



現場で活躍する女性社員

女子のチカラで、
チーム力がさらにアップ。

建設業の現場は典型的な男社会。暑さ寒さに耐え忍び、時には材料を担ぎ、重機を操る。まさに、「タフでなければ生きていけない」世界である。だが、小柳建設の現場では、入社2年目の女性社員2人がいきいきと活躍している。

舗道事業部技士の岡本真美は、舗装の現場で大型アスファルトフィニッシャーの操作を任せられ、冬場は除雪ドーザーを運転して除雪現場にも出動する。「最初は機械の操作がうまくいかず落ち込むこともありましたが、上司や先輩から『チームみんなでカバーするから、怖がらずにやれ』と背中を押され、気持ちを切り替えることができました」と語る。



「大型機械を操作する私の写真を見た小学生の娘は、『カッコいい、お母さんだってお父さんみたい』と言っていました」(岡本)。



「今はまだ、周りの人たちから日々学んでいる段階ですが、将来は『女性も活躍できる建設業』をPRできる社員になりたいです」(竹内)。

社内技術発表会

知識を分かち合い、
技術を伝承する。

2015年5月、加茂市文化会館において「第1回小柳建設グループ技術発表会」が開催された。これは、発表を通じて現場での体験や知識を社員同士で分かち合い、グループ全体の施工技術の底上げを図る初の取り組みである。当日は論文審査を通過した9人が登壇、技術発表と質疑応答が行われ、厳正な審査を経て最優秀賞が選ばれた。技術発表会は今後も継続的に開催していく。

発表内容は事例集としてまとめ、技術の伝承に活用していく。



ベトナムからの実習生受け入れ

母国の発展のために。
思いを胸にやって来た5人の若者。

実習生5人は、すでに現場の大事な戦力として活躍している。

2015年4月、小柳建設では初めて海外からの実習生を受け入れた。やってきたのはベトナムの5人の若者。経済成長著しいベトナムだが、道路や鉄道、電力などのインフラ整備はまだこれから。日本の先進的な技術を学び、母国の経済発展に役立ちたいという思いを胸に、はるばる海を越えて新潟の地に降り立ったのだ。

その実習生たちの指導役となったのが、舗道事業部副部長の伊藤智克。日本語もまだおぼつかない彼らを、伊藤副部長はすぐに現場に連れ出した。材料の運搬や現場の片づけなど、できる仕事はいくらでもある。まずは身振り手振りで教え、それでも通じなければスマートフォンの翻訳機能を使って教えた。



ロードローラーの運転資格試験を日本語で受け、5人全員が合格した。

仕事が終われば毎日、日本語を覚えるために、漢字ドリルをしながら日本語で日記を書いた。「成長の速い子供を見ているようで、会話や仕事の基礎は3ヵ月くらいで身につけてしまいました」と伊藤副部長は目を細める。

実習生の一人で、大学で電気工学を学んだグエン・アン・アイン・トゥオンさん(22歳)は、「仕事は大変だけど、おもしろい。ベトナムに帰っても建設の仕事がしたいです」と語る。

「日本人の技術や丁寧な仕事ぶりを身につけて帰ってほしい」と伊藤副部長。今年も第2期の実習生を舗道事業部と環境保全事業部で受け入れる。



「日本で学んだ技術を母国で役立ててほしい」(伊藤)。

一人では何もできない。
たった一人の過ちが、
すべてを崩す。
だからこそ、
一人一人全力で、
互いに支え合いながら、
励まし合いながら、
それが建設の現場です。



WORK BOLD